

那霸市文化財調査報告書第95集

鏡水箕隅原古墓群

—沖縄西海岸道路「那霸西道路」建設事業に係る緊急発掘調査報告—

2013年3月

那霸市教育委員会

かがんじみーぬしんばる こ ぼ ぐん
鏡水箕隅原古墓群

—沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に係る緊急発掘調査報告—

序

本書は2011（平成23）年度に実施した沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設に係る埋蔵文化財緊急発掘調査の成果報告書であります。

「鏡水箕隅原古墓群」は、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所による上記道路建設工事に伴って発見されたものです。この道路は、「慢性的な渋滞をきたしている本島の大動脈・国道58号、331号の混雑を緩和するため」、「那覇市街部及びその周辺の交通渋滞対策に大きく寄与し、那覇空港へのアクセス向上並びに南北の接続機能の向上を図るために計画」されたもので、今後の整備に期待が高まります。

さて、本遺跡の発掘調査は、沖縄近世から近代に属する古墓1基が対象で、「お墓」に伴う資料が得られています。特に、蔵骨器には墨書による「銘書＝ミガチ」が記された資料が出土しており、遺構の年代・被葬者などをうかがい知る重要な資料の一つです。その他に煙管や指輪、硯なども得られており、葬送儀礼に関する研究にも寄与できる好資料と言えます。今後とも周辺地域での発掘調査を進めることで沖縄近世・近代における先人達の死生觀の一端が明らかになることでしょう。

本報告書が、市民の皆様はもとより多くの方々に活用され、文化財保護行政の一助となることを希望いたします。末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成25年3月
那覇市教育委員会
教育長 城間 幹子

例　言

1. 本報告書は、那覇市教育委員会が内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所の委託を受けて2011（平成23）年度に実施した「鏡水箕隅原古墓群緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 調査は、沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に係るもので、那覇市教育委員会が実施した。
3. 本発掘調査は、那覇市教育委員会の管理・指導のもと、調査現場での掘下げ作業・測量・写真撮影等の発掘調査作業に伴う業務を民間調査組織（有限会社 ティガネー）へ委託した。また、発掘調査に先立ち現地周辺の磁気探査業務は、株式会社 カイケンエンジニアリングに委託した。
4. 第2表、第4図、図版2は、現地調査（委託業務）で作成（吉岡宏氏、譜久里昌代氏、慶田秀美氏、高江洲かい氏 他）された成果品を基に掲載した。
5. 第V章Fは、城間千栄子氏より報告いただいた。記して感謝申し上げる。
6. 附篇は、株式会社 文化財サービスに委託し、報告いただいた（青山奈緒氏、土肥直美氏、比嘉洋子氏）。記して感謝申し上げる。
7. 調査および資料整理は下記の方々に指導・協力を得た。記して感謝申し上げる。
 - ・濱田泰臣氏（陸上自衛隊 那覇駐屯地 業務隊 管理科 営繕班 管財主任）
 - ・字鏡水軍用地等地主会
 - ・那覇軍用地等地主会
 - ・字鏡水しみず会
 - ・字鏡水郷友会
 - ・字鏡水自治会
 - ・志良堂恵氏・城間千栄子氏・宮良知子氏・豊里加奈子氏・国吉真由美氏・
西銘貞子氏・大城亜姫代氏・宮城みさ子氏・請盛智秋氏・石原愛子氏
(以上、那覇市教育委員会非常勤職員)
8. 図版1の空中写真（2010年撮影）、第1図の那覇市全図（平成18年2月発行）は、国土地理院発行のものを複製して使用した。
9. 第1図に使用した広域図は、坂本幸雄 株式会社 ティビーエス・ブリタニカ『ブリタニカ国際地図』1991年7月1日（第2版改訂発行）の91ページの部分をトレースして使

用した。

10. 第2図は、「都市計画図 1:2,500 平成7年12月修正 那覇市作成」を縮小複写し貼り合わせて使用した。
11. 第3図は、沖縄タイムス朝刊 「思い出のわが町」より、「<66>戦前の字鏡水民俗地図」1977年12月8日を加筆・トレースして作図した。
12. 本報告書の執筆は以下の通りである。編集は樋口麻子・城間千栄子の協力を得て、仲宗根が行った。

第I章～第IV章 仲宗根啓

第V章 第1節 樋口麻子

第2節 A～E 仲宗根啓 城間千栄子

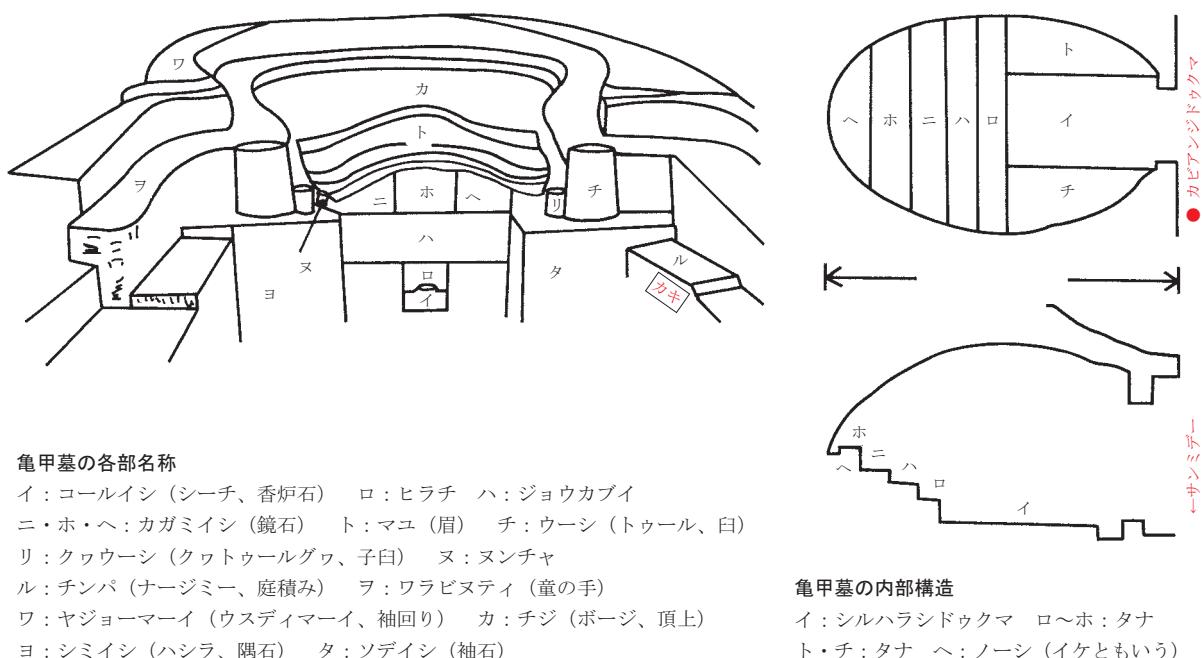
F 城間千栄子

第VI章 仲宗根啓 樋口麻子 城間千栄子

附篇 株式会社 文化財サービス

13. 番号と写真図版の番号は一致するように配置してある。

14. 出土遺物は那覇市教育委員会文化財課で保管している。



亀甲墓の各部名称

イ: コールイシ (シーチ、香炉石) ロ: ヒラチ ハ: ジョウカブイ
ニ・ホ・ヘ: カガミイシ (鏡石) ト: マユ (眉) チ: ウーシ (トゥール、臼)
リ: クワウーシ (クワトゥールグワ、子臼) ヌ: ヌンチャ
ル: チンパ (ナージミー、庭積み) ヲ: ワラビヌティ (童の手)
ワ: ヤジョーマーイ (ウスディマーイ、袖回り) カ: チジ (ボージ、頂上)
ヨ: シミイシ (ハシラ、隅石) タ: ソディイシ (袖石)

亀甲墓の内部構造

イ: シルハラシドウクマ ロ～ホ: タナ
ト・チ: タナ ヘ: ノーシ (イケともいう)

凡例 遺構の名称 (『那覇市史 資料篇 第2巻中の7 那覇の民俗』 p 648・649の図を転載した。一部加筆等あり。)

目次

序	
例言	
第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第Ⅲ章 調査経過と調査組織	6
第1節 調査経過	6
第2節 調査組織	7
第Ⅳ章 遺構	8
第Ⅴ章 遺物	11
第1節 蔵骨器	11
第2節 その他の遺物	14
A 沖縄産陶器・B 中国産磁器・C 円盤状製品・D 指輪・	
E 煙管・F 骨製品・貝製品	
第Ⅵ章 総括	19
附篇 鏡水箕隅原古墓群出土人骨 鏡水箕隅原古墓群の墓室壁の赤土分析	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 那覇市の位置と遺跡の位置	2
第2図 本遺跡周辺の地形（平成7年）	3
第3図 戦前の字鏡水民俗地図	4
第4図 第1号墓	9
第5図 専用蔵骨器	13
第6図 その他の遺物	17
第7図 骨製品、貝製品	18

挿表目次

第1表 調査工程	6
第2表 第1号墓観察一覧	8
第3表 身・蓋分類	11
第4表 専用蔵骨器観察一覧	12
第5表 専用蔵骨器出土一覧	12

第6表 その他の遺物出土一覧	15
第7表 その他の遺物観察一覧	16

図版目次

図版1 遺跡一帯の空中写真	
図版2 遺跡の遠景	
図版3 遺構の近景	
図版4 磁気探査業務の作業状況	
図版5 作業状況①	
図版6 作業状況②	
図版7 遺構の状況	
図版8 主な遺物の出土状況	
図版9 専用蔵骨器	
図版10 専用蔵骨器	
図版11 その他の遺物	
図版12 骨製品、貝製品	

鏡水箕隅原古墓群発掘調査報告書

第Ⅰ章 調査に至る経緯

本遺跡は、沖縄県那覇市字鏡水に位置する。同地域は、陸上自衛隊那覇駐屯地として使用されている地域である。同地域において、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（以下、南部国道事務所）による「沖縄西海岸道路 那覇西道路」建設が進められていた。「那覇西道路は、沖縄西海岸道路（延長約50 km）の一部を構成する道路で」、「国道58号の渋滞緩和」「那覇空港へのアクセス向上」「那覇港の機能向上」が整備効果として上げられている。

さて、那覇西道路（那覇市若狭～那覇市鏡水の約3 km）工事の中で、沖縄県那覇市鏡水地先において古墓が発見された旨、2011（平成23）年3月7日、南部国道事務所から那覇市教育委員会（以下、市教委）に連絡が寄せられた。連絡を受け、市教委、南部国道事務所は、3月8日に現地立合い作業を行った。古墓は、沖縄近世から近代にかけての亀甲墓であった可能性が確認され、埋蔵文化財として認識された。

その後、3月11日に遺跡の取り扱いについて、両者にて調整会議を行った結果、工事計画変更は不可能で、遺跡の記録保存を行うこととなった。3月14日には、工事施工可能範囲と遺跡の現況保存範囲について現地にて確認を行った。なお、遺跡の名称は、近接した小高い丘陵が「ミーヌシン毛」と称され拝所の対象とされている周知の名称となっていることや鏡水箕隅原A・B・C・D遺跡が立地していることなどから、遺跡の立地を明示できる「箕隅原＝ミーヌシンバル」に大字の「鏡水」を冠して便宜的に「鏡水箕隅原古墓群」とした。

以下、遺跡発見に係る文化財保護法の手続きについて略記する。

3月22日付、府国南事328号 「遺跡発見の通知について」

3月28日付、那教生文第541号 「遺跡発見の通知について（進達）」

3月31日付、教文第2091号 「遺跡の発見について（通知）」

4月5日付、那教生文第1号 「遺跡の発見について（送付）」

6月22日には、発見された古墓周辺において、試掘調査が市教委によって実施された。しかし、当初発見された古墓以外の埋蔵文化財は発見されず、記録保存を対象とする埋蔵文化財は、古墓一基と確認された。

その後、発掘調査に関する諸調整（調査期間及び経費等）を市教委と南部国道事務所の両者において行い、10月25日付で「沖縄西海岸道路（那覇西道路）建設に係る鏡水箕隅原古墓群発掘調査業務に関する協定書」、12月27日付で「平成23年度 那覇西道路建設工事に伴う鏡水箕隅原古墓群発掘調査に関わる契約書」を締結した。

現地での発掘調査は、2012（平成24）年2月6日から2月23日までの期間で実施された。なお、調査は、発掘調査支援業務として「有限会社ティガネー」に委託した。



第1図 那覇市の位置と遺跡の位置



第2図 本遺跡周辺の地形（平成7年）

(S=1:10,000)



第3図 戦前の字鏡水民俗地図

参考

- 内閣府 沖縄総合事務局 南部国道事務所 『沖縄西海岸道路 那覇西道路』 (パンフレット)
- 内閣府 沖縄総合事務局 南部国道事務所 ホームページ 『お約束プロジェクト 2007』
- 内閣府 沖縄総合事務局 南部国道事務所 『沖縄西海岸道路 那覇西道路 お約束プロジェクト』 (パンフレット)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

本遺跡は、沖縄県那覇市鏡水地内に所在する。

市の位置について那覇市のホームページによると、「沖縄県は、北緯24~28度、東経122~133度の南北約400km、東西約1,000kmの海上に弧を描いて連なる160の島しょの内、有人島39からなっています。その中で那覇市は最大の島、沖縄本島南部に位置します。また、本市は鹿児島と台北のほとんど中間にあり、那覇を中心とする1,500kmの円周域には、東京、ピヨンヤン、香港、ソウル、北京、マニラなどの主要な都市があり、交通通信機能の上からも東南アジアの各都市を結ぶ要衝の地点であり、わが国の南の玄関として地理的に好条件の位置にあります。」と紹介されている（第1図）。

本市の地形等を概観すると、東シナ海に西面し、東側に弁ヶ嶽・首里城付近を頂点とする台地があり、南側には小禄台地、北側は天久台地が占地する。その台地などを源として、北から安謝川・安里川・国場川が西流する。安謝川は安謝港、安里川は泊港、国場川は那覇港を経て、東シナ海に注ぐ。また、市の周辺は、北に浦添市、東に西原町、南風原町、南に豊見城市が接している。本市の概要は、その面積39.23[†]m²（推計）、総人口321,589人（2013年1月現在）を擁する県庁所在地である。県庁などが所在する泉崎、国際通り（県道39号線）周辺に企業や官公庁が集中し、活気を呈している。さらに、本市北西側では、1987（昭和62）年、「天久解放地」と称されていた米軍用地が全面返還され、「那覇新都心」として整備され発展を遂げている。

本遺跡周辺における主な遺跡の分布を第2図に示した。沖縄先史時代から沖縄近世期の古墓群まで多種多様な遺跡が知られるようになってきた。その分布は、陸上自衛隊那覇駐屯地内の北側に多い傾向にある。近年、同地域における諸開発申請に伴って、遺跡の発見が相ついだ結果だと言える。今後、遺跡の保存を含め事前の調整をより慎重に行っていくことも必要であろう。

さて、今回の調査は、同地域における本格的な古墓の発掘調査の初例である。第3図には、昭和期の遺跡周辺の民俗地図を示した。遺跡は集落からの北側に所在する「ハラタ毛」と称される小高い丘に位置している。出土した蔵骨器の銘書（ミガチ）の「原田」との関連にも注目したい。

参考資料・引用文献

- 「那覇市 位置・面積」 那覇市ホームページ
- 『広報なは 市民の友』 第746号 那覇市 2013年（平成25年）3月

第Ⅲ章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

本遺跡の発掘調査は、第Ⅰ章でも述べたとおり、2010（平成22）年度（2011（平成23）年3月7日）に古墓の発見の連絡を受け、2011（平成23）年度（6月22日）に試掘調査を実施し、その成果を受けて、2012（平成24）年2月6日から2月24日の期間で実施された。なお、報告書作成作業は、2012（平成24）年度に実施した（第1表）。

第1表 調査工程

年度 工程	2010年度 (平成22年度)	2011年度 (平成23年度)	2012年度 (平成24年度)
遺跡発見	→		
試掘調査		→	
発掘調査		→	
資料整理		→	
報告書作成			→

調査では、陸上自衛隊那覇駐屯地の多大な協力を得て行った。また、調査終了後の2012（平成24）年3月8日には、調査の成果について現地説明会を実施した（主に地主会等）。

さて、現地での発掘調査は、陸上自衛隊那覇駐屯地内の立ち入りが制限された地域であったため、作業をしばしば中断することもあったが、概ね順調に作業は進行した。

本遺跡の調査は、沖縄西海岸道路（那覇西道路）建設計画に伴って実施されたもので、その対象は、古墓一基であった。まず、遺跡の埋土についてバックホーを使用して除去、墓庭の範囲を確認した。一方、埋土除去作業と平行しながら磁気探査作業も実施された。

発掘調査は、墓庭から墓正面に向かって左右を称することで開始した。遺構の各部分の呼称については、従来から使用されている名称を使用した。

以下、調査概要を業務日誌より略記する。

2012（平成24）年

- 1月20日 那覇市教育委員会と有限会社ティガネーによる「平成23年度 鏡水箕隅原古墓群発掘調査業務委託」を締結。
- 24日 陸上自衛隊那覇駐屯地にて担当者との調整会議を実施。
- 2月6日 発掘調査を開始する。磁気探査業務も合わせて実施。なお、翌日から10日まで基地内の立ち入り制限により作業を中断する)
- 13日 調査再開。
- 15日 墓庭にトレーナーを設定。掘下げ作業を行う。
- 20日 墓室の清掃を行って、蔵骨器の検出状況の写真撮影を行う。サンミラーの一部が

- 掘り込まれ蔵骨器等が廃棄された状況で出土する。
- 21日 遺構の全体清掃を行って完掘状況の写真撮影を行う。墓室について、壁面の漆喰の状況について写真撮影後、除去作業を行う。その結果、琉球石灰岩礫と赤土で構築された壁面であることが確認された。サンミディー部の掘り込み内などから少量の人骨片が検出される。
- 23日 遺跡の遠景を撮影。
- 24日 遺構の写真測量補測及び機材等の撤去を行って現地での作業をすべて終了する。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は以下のとおりである。

(1) 調査組織

事業主体	那覇市教育委員会	教育長	城間 幹子	(平成22～24年度)
事業所管	文化財課	課長	古塚 達朗	(平成22～24年度)
調査総括	文化財課	副参事	島 弘	(平成22～24年度)
調査事務	文化財課	副参事	島 弘	(平成22～24年度)
	"	主幹	内間 靖	(平成22～24年度)
	"	主査	會澤 一大	(平成23・24年度)
	"	主任主事	仲宗根 健	(平成22・23年度)
	"		瑞慶山由香里	(平成24年度)
	"	主事	古波藏 七保	(平成24年度：臨時職員)
調査員	文化財課	副参事	島 弘	
	"	主幹	内間 靖	
	"	専門員主査	玉城 安明	
	"		北條 真子	
	"		仲宗根 啓	
	"	主任専門員	樋口 麻子	
	"		當銘 由嗣	
	"	専門員	知念 政樹	

(2) 発掘調査（有限会社 ティガネー）

吉岡宏 友利盛雄 具志誠 尾崎真太郎 友寄英人 慶田秀美 高江洲かい
譜久里昌代 安慶名義一 大城健榮 武島毅 久林美奈子 宮城龍一 与儀清

(3) 資料整理

高良夏枝 真栄城和美 山下真利子 山下美也子

第IV章 遺構

本遺跡より検出された遺構は、古墓1基である（第4図）。

墓庭から墓正面に向かって右側には、「ウーシ」や「ワラビヌティ」を意識した造りが見られることから、その外観は、亀甲形式を呈していたものと考えられる。

遺構は、全体的に基盤である琉球石灰岩をはつて構築されていた。特に、遺構の右側から墓庭にかけては、岩盤の上に造成土を盛って使用面としている。墓室は、琉球石灰岩が脆かったためか、「赤土」と琉球石灰岩礫を利用して補強して構築されていた。

また、サンミラー右側には、大きな土坑が掘り込まれており、蔵骨器等がまとまって検出された。これは、墓を移転する際に廃棄された資料と考えられた。

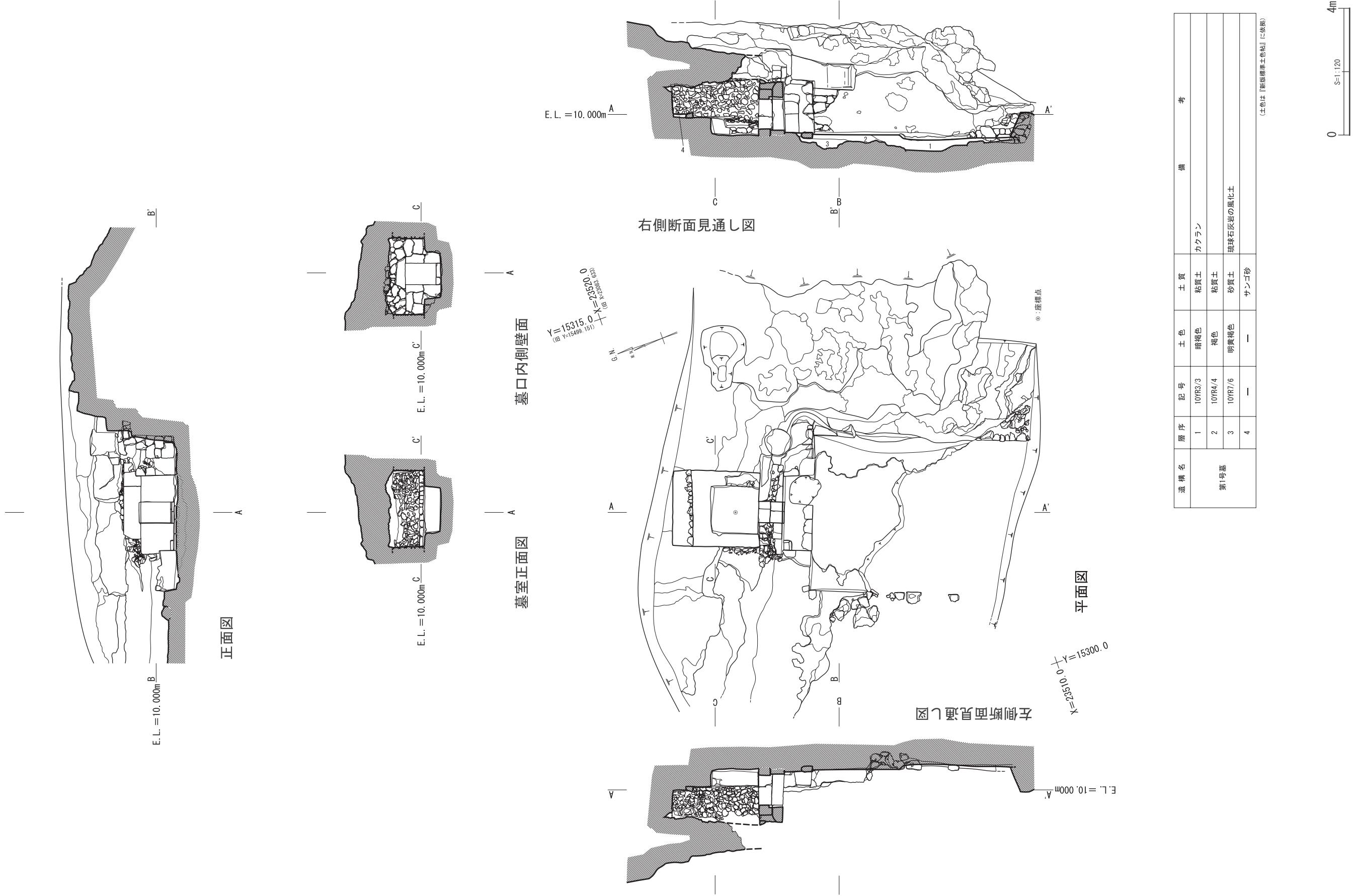
なお、本遺跡発見の際には、すでに遺構の正面を構成する石材が散在していた。それらの資料からも当該遺構が亀甲型であったことが理解できる。

以下、遺構の特徴を第2表に示す。

第2表 第1号墓観察一覧

外観形式：	亀甲墓	立地場所の基盤：	琉球石灰岩
座標：	X= 23518.005	Y= 15307.834	標高： 9.338 m 主軸方向：S-19° -W
I. 墓室			
1) 構築方法：岩盤の掘り込みを加工後、石積みと土壁を組み合わせる。			
2) 平面形：方形	奥行： 2.74 m	幅： 2.42 m	高さ： 1.62 m (※2段目のタナからの高さ 0.81 m)
3) タナの有無：	有		面積： 6.63m ²
1段目	奥行： 0.57 m	幅： 2.42 m	高さ： 0.52 m
2段目	奥行： 0.62 m	幅： 2.38 m	高さ： 0.16 m
右側壁側	奥行： 0.48 m	幅： 2.15 m	高さ： 0.50 m
左側壁側	奥行： 0.41 m	幅： 2.08 m	高さ： 0.48 m
4) 蔵骨器	陶製家形蔵骨器・陶製有頸甕形蔵骨器破片・陶製無頸甕形蔵骨器破片		
5) 銘書	シルハラシドウクマ：光緒六囲・・・／囲口旧九・・・ サンミラー上面：原田之長男高良築登之童名樽 明圈・・・廿年旧亥七月四日死亡		
II. 墓口			
1) 構築方法：	石積み		
2) 規模 奥行：	0.81 m	幅：	0.67 m 高さ： 1.04 m
3) サンミラーの構築方法：	石組み		
III. 墓庭			
1) 墓庭の構築方法：	岩盤を整形して盛土		
2) 墓庭の平面形：	長方形	奥行：	(6.30 m) 幅： 4.90 m 面積： 30.87m ²
3) カキの構築方法：	両袖は岩盤の削り出しと石積みを組み合わせる。		
IV. その他施設			
・サンミラー左角にカビアンジドウクマ有り。			
V. 備考			
墓室右側のタナの一部には石積みが施される。右側のウーシ・ワラビヌティと右カキは岩盤の削り出しが構築し、一部石積みを組み合わせる。サンミラー東側に掘り込み有り（人骨・鉄片など含む）。墓庭南西側に掘り込み有り。左カキの石積みの崩落が確認できる。墓前面部マユから屋根までは失われている。			

第4図 第1号墓



第V章 遺物

本遺跡から出土した遺物は、蔵骨器20点（第5表）、中国産磁器など518点（第6表）が得られている。

ここでは、蔵骨器とその他の遺物（沖縄産陶器、中国産磁器、円盤状製品、指輪・煙管、骨製品・貝製品）を紹介する。

以下、出土遺物の種類ごとに概略を示す。

第1節 蔵骨器

本遺跡において出土した蔵骨器は、20点である。第3表は、身・蓋を分類した表である。出土した20点を、この表を元に分類した。その結果、I Bb 類が7点、II A 類が4点、II Ba 類が7点、II Bb 類が1点、種別不明が1点である（第5表参照）。身と蓋がセット関係にあることを考慮し、重複して数えることを避けるため、身・蓋いずれかの多い数を個体数とする。その結果、少なくとも I Bb 類が4点、II A 類が2点、II Ba 類が6点、II Bb 類が1点出土していることとなり、II Ba（甕形陶製有頸軒無し）類が、最多となる。

銘書きがある資料は、3点得られている（第4表参照）。「原田」「高良」の名前が確認でき、19世紀後半の年号が読み取れる。

第5図は、出土資料の内、計測に耐え得る資料を掲載した。1と2は、色調・質感が似通つており、セット関係にある可能性が高いが、確証はない。

本遺跡の蔵骨器は、出土数が大変少なく、これらの資料から結論を導き出すのは早計であると考える。しかし、全体的な印象として、判読できた銘書きが19世紀後半ということもあり、比較的後代の時期に使用された墓ではないかと考える。

第3表 身・蓋分類

身			蓋
I 家形	A 石製		① 切妻
	B 陶製	a 陶質土器（赤焼）	② 寄棟
		b 施釉陶器（上焼）	③ 入母屋
II 甕形	A 陶製無頸（ボージャー）		
	B 陶製有頸（マンガン）	a 軒無し	① 宝珠形つまみ ② まんじゅう形つまみ ③ つまみ無し
			① 5 mm 以上の「き」 ② 5 mm 未満の「き」 ③ 「き」無し
III 円筒形		b 軒有り	1 降棟に装飾有り 2 降棟に装飾無し
			① 降棟に装飾有り ② 降棟に装飾無し
			① 宝珠形つまみ

第4表 専用蔵骨器観察一覧

身：上部幅
下部幅
奥行
器高

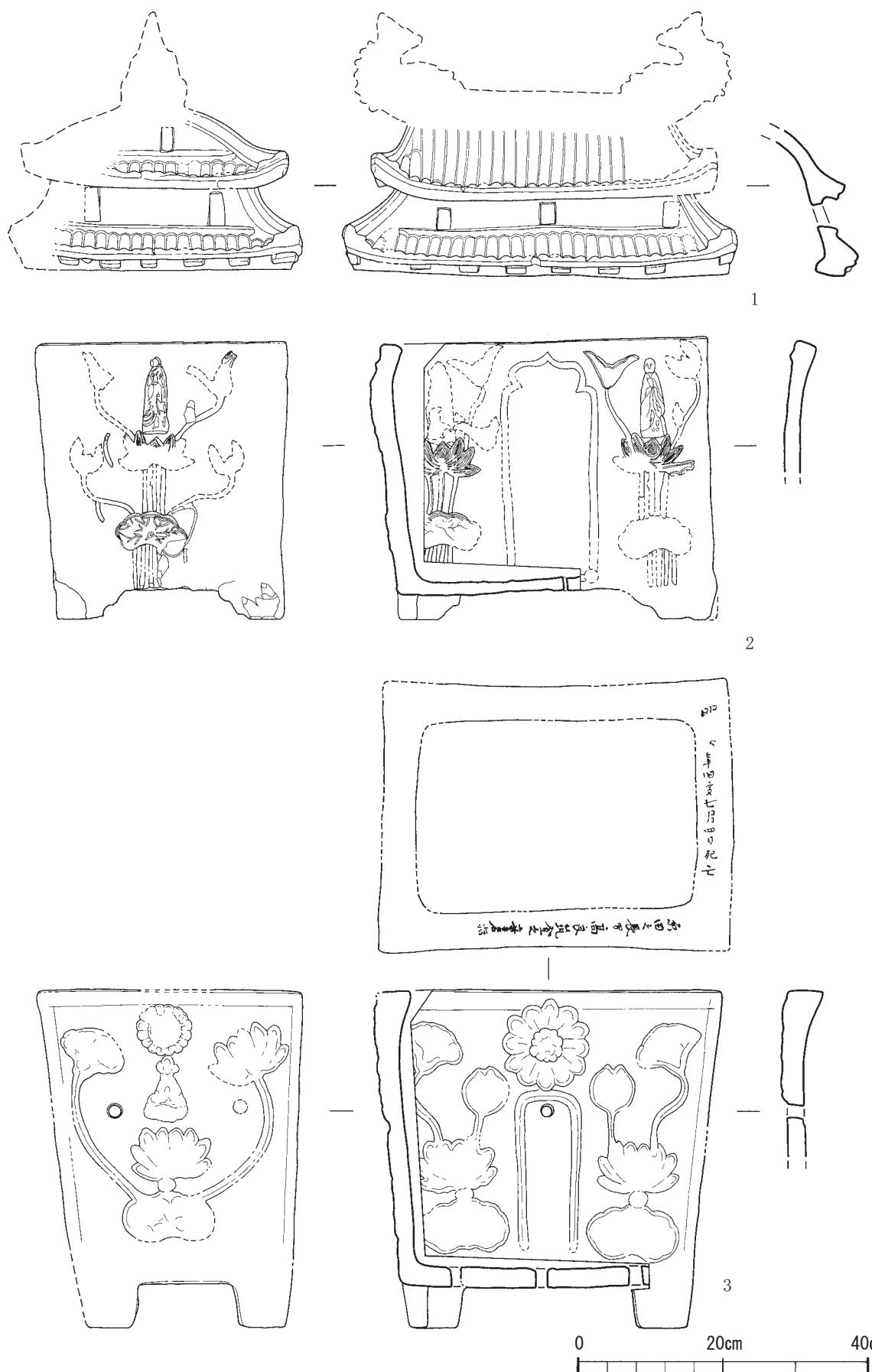
蓋：上部幅
下部幅
奥行
器高

(cm)※()は推定値

連番	挿図番号 図版番号	墓番号	身・蓋	名称又 は仮称	形式分類	法量	対No.	銘書	氏	家名	名乗頭	死去年	洗骨年	備考
1	第5図1 図版9の1	第1号墓	蓋	家形陶製	I B b③	(52.0) (52.0) (36.8) (35.8)								
2	第5図2 図版9の2	第1号墓	身	家形陶製	I B b	45.2 43.6 34.5 38.4								
3	第5図3 図版10の1	第1号墓	身	家形陶製	I B b	48.3 38.5 36.5 46.8		原田之長男高良筑登之童 名樽，明治…廿年旧亥 七月四日死亡	原田 高良		明治20年 (1887年) 丁亥		明治20年 (1887年) 丁亥	
4		第1号墓	蓋	甕形陶製 有頸	II B b(?)			…國口旧九…						
5		第1号墓	蓋	甕形陶製 有頸	II B a(?)			光緒六圍…					光緒6年 (1880年) 庚辰	

第5表 専用蔵骨器出土一覧

出土地点	形式分類	家形陶製 (I B b類)				甕形陶製無頸 (II A類)				甕形陶製有頸軒無し (II B a類)				甕形陶製 有頸軒有り (II B b類)		不明 合計
		身		蓋		身		蓋		身		蓋		身		
		口	底	完	上	下	口	底	上	下	口	底	下	下	底	
第1号墓	墓室シルハラシドウクマ 蔵骨器No.1															
	墓室シルハラシドウクマ精査時															1
	サンミラー上面 蔵骨器No.2															
	羨道部															
	サンミラー上面															
	サンミラー上面 蔵骨器No.2															1
	サンミラー東側掘り込み															
	墓庭南西側掘り込み埋土															
	墓室奥壁タナ1段目 蔵骨器No.1															
	墓室奥壁タナ2段目 蔵骨器No.1															1
	サンミラー上面 藏骨器No.2															
	サンミラー上面															
	墓室シルハラシドウクマ精査時															
	サンミラー上面															1
	サンミラー東側掘り込み															
	墓室奥壁タナ2段目 蔵骨器No.1															
各部位計	表採															
	墓庭覆土															1
	サンミラー上面 蔵骨器No.2															1
	表採		1													1
	墓室シルハラシドウクマ精査時															1
	墓庭埋土															1
	墓室シルハラシドウクマ 蔵骨器No.1															1
	墓室シルハラシドウクマ精査時															1
	墓室シルハラシドウクマ精査時															2
	周辺表採							1	1		1	1				4
出土地点	羨道部									1						1
	墓庭埋土										2	2				4
	墓庭南西側掘り込み埋土															1
	各部位計	1	1	2	2	1	1	1	1	4	2	1	1	1	20	
	形式分類	口	底	完	上	下	口	底	上	下	口	底	下	底		合計
		身形陶製 (I B b類)				甕形陶製無頸 (II A類)				甕形陶製有頸軒無し (II B a類)				甕形陶製 有頸軒有り (II B b類)	不明	



第5図(図版9・10) 専用藏骨器(蓋1、身2・3)

第2節 その他の遺物

A 沖縄産陶器（第6図1～3 図版11の1～3）

沖縄産陶器は、施釉陶器52点（種類としては、碗15点・小碗13点・皿3点・鉢2点・壺2点・火入2点・蓋2点・灯明具1点・その他12点）、無釉陶器25点（種類としては、瓶2点・壺1点・徳利1点・鉢3点・擂鉢5点・その他13点）、陶質土器29点（種類としては、鍋1点・火炉1点・土瓶1点・蓋5点、その他21点）が出土した。

その中から、施釉陶器（碗、壺、灯明具）を第6図に図示した。なお、個々の資料の特徴は、第7表に示す。

B 中国産磁器（第6図4～6 図版11の4～6）

中国産磁器は、青花10点（種類としては、碗7点・皿2点・その他1点）、瑠璃釉（壺）1点が出土した。

その中から、青花（碗）を第6図に図示した。なお、個々の資料の特徴は、第7表に示す。

C 円盤状製品（第6図7・8 図版11の7・8）

円盤状製品は、5点が出土した。使用されている種類としては、沖縄産施釉陶器1点、無釉陶器3点、瓦質土器1点である。

その中から2点を第6図に図示した。なお、個々の資料の特徴は、第7表に示す。

D 指輪（第6図9・10 図版11の9・10）

指輪は、2点出土した。

第7表に個々の資料の観察を示した。

E 煙管（第6図11 図版11の11）

煙管は、1点出土した。

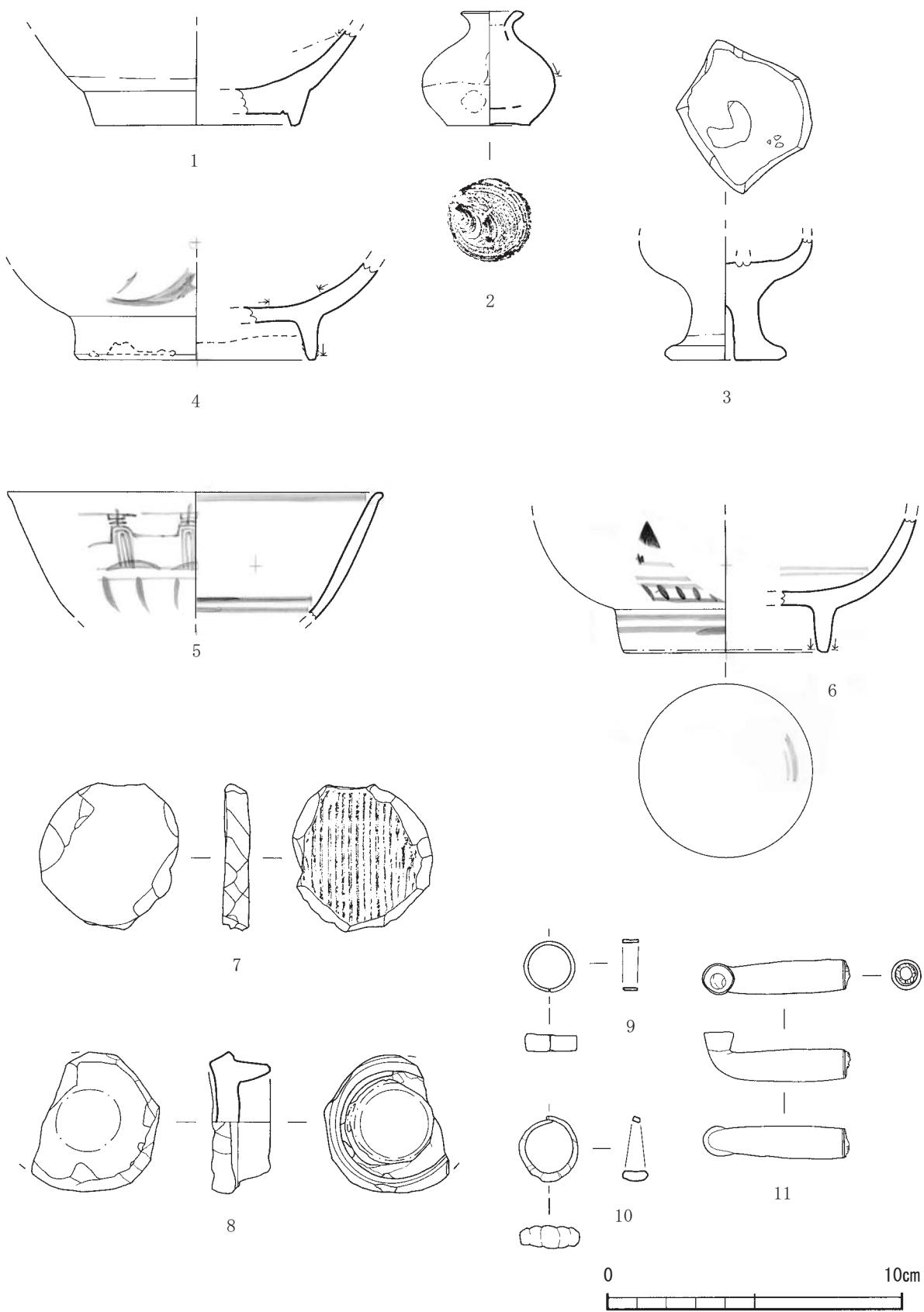
第7表に資料の観察を示した。

第6表 その他の遺物出土一覧

		中国產磁器			本土產陶磁器			沖繩產陶器			石製品等			青銅製品			鉄			漆塗瓦			レンガ			漆塗灰			現代遺物			その他			合計		
		青花	瑠璃釉	磁器	不明	陶器	不明	施釉	不明	無軸	陶質土器	不明	貝製品	石器	硯	その他	円盤狀製品	卷貝	一枚貝	傳管	指輪	不明	釘	不明	漆塗	瓦	漆塗灰	瓦	漆塗	灰	現代遺物	その他	合計				
	埋土																																				
	タナ一段目																																				
墓室	タナ二段目 (鐵骨器No.1)																																				
	タナ二段目 (サンゴ砂)																																				
	シルハラシドウクマ																																				
	2																																				
墓道部																																					
	上面																																				
サンミニティー	東側掘り込み	1	1	1																																	
	覆土	1	1	1																																	
	東側掘り込み	2	1																																		
墓庭	西側掘り込み	3	23	5	1	3	15	1	4	2	2	5																									
	南西側掘り込み												3																								
	埋土	4	32	9	1	6	20	4	5	8	2	5		2	4	9	5	4	6																		
	墓口 (上部)		1																																		
	左カキ外側																																				
	上部																																				
石盤	東側	2	19	3	1	1	4		1	2	3	8		11	10	1	1	1	1	2	1	12															
	西側												1																								
	表採																																				
	小計	10	1	82	20	4	10	40	12	12	13	8	21	1	2	17	1	42	5	9	21	1	2	1	13	18	71	3	1	1	69	7	518				
	合計	11	102	14	52	25	29	1	2	60	5	30	4	31	71	3	1	1	69	7	518																

第7表 その他の遺物観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	器種	口径 器高 底径 (cm)	重さ (g)	色調など	文様・特徴など	出土地点
第6図1 図版11の1	施釉陶器	碗	- 7.0	-	釉色：灰黄色 素地：灰色	灰釉碗の底部である。 内面に僅かに釉切りが確認できる。 外面腰部に明瞭なヘラ削りによる稜がみられる。	墓庭 埋土
第6図2 図版11の2	施釉陶器	壺	2.1 3.9 2.8	-	釉色：黒色 素地：橙色	口縁部が大きく開き、胴部が丸みを持つ器形で、ほぼ完形である。 施釉範囲は口縁内側から外面の胴部中頃まで。 底部に糸切り跡が明瞭に見られる。	墓庭 南西側
第6図3 図版11の3	施釉陶器	灯明具	- 4.0	-	釉色：褐色 素地：橙色	脚部から腰部の資料である。 施釉範囲は、内面から外面脚の立上がりまで。 底部には僅かに糸切りらしきのが見られ、約6mmの穴を穿つ。	墓庭 埋土
第6図4 図版11の4	中国産青花	碗	- 8.2	-	文様：淡い呉須 素地：白色	底部の資料である。 内底面に蛇の目、疊付けは露胎で、砂が付着。 外面腰部に文様が見られるが構図は不明。	東側 岩盤南端 表採
第6図5 図版11の5	中国産青花	碗	12.8 - -	-	文様：淡い呉須 素地：白色	外反する口縁部の資料である。 内面口縁に1本、腰部に2本の圈線が見られる。 外面は、寿字文とその下に圈線が2本と散し文を廻らす構図と考えられる。	墓庭 埋土
第6図6 図版11の6	中国産青花	碗	- 7.0	-	文様：呉須 素地：白色	底部の資料である。 内外面に施釉し疊付けは露胎である。 内面腰部に圈線が2本。外面は構図不明文様、 その下に圈線が1本、腰部に2本、その下に 1本、圈線に挟まれて散し文がみられる。高 台と外底面に圈線が2本づつ廻る。	墓庭 東側 岩盤上
第6図7 図版11の7	円盤状製品	沖縄産 無釉陶 器擂鉢	最大：径5.0cm 厚さ：0.9cm	29.2	表面：にぶい褐色 裏面：にぶい赤褐色 断面：にぶい赤褐色	擂鉢胴部を使用した製品である。 内面から外面に打割を施しほぼ円形に成形。 外面にも剥離が及ぶ。	墓庭 埋土
第6図8 図版11の8	円盤状製品	沖縄産 施釉陶 器小碗	最大：径4.7cm 厚さ：2.0cm	29.9	内面：灰白色 外面：暗赤褐色 断面：浅黄橙色	小碗の底部を使用した製品である。 外面釉色は褐色で、内面に蛇の目釉剥ぎが見 られる。 内面から外面に打割を施し成形。一部破損。	墓庭 埋土
第6図9 図版11の9	指輪	-	径：1.7 幅：0.6~0.5	1.5	緑灰色	青銅、石灰質が付着した完形資料である。 リグ外側に縦沈線が廻る。継ぎ目の反対側に は金色の丸形の文様が確認できる。	墓室 タナ一段目
第6図10 図版11の10	指輪	-	径：2.2 幅：0.8~0.2	2.7	緑灰色	青銅、石灰質が付着した完形資料である。 継ぎ目の反対側を中心に楕円形を連続させた 装飾が施されている。	墓室 シルバントウカマ 清掃時
第6図11 図版11の11	煙管	雁首	長さ：5.0 接続径：1.0	9.9	暗緑灰色	雁首のほぼ完形資料である。 接続部の際に沈線が1本廻る。厚みは約1mm、火皿径は10mmを測る。資料内部にラウ が残る。	墓庭南西側 掘り込み埋土



第6図(図版11) その他の遺物：沖縄産陶器（1～3）、中国産磁器（4～6）
円盤状製品（7・8）、指輪（9・10）、煙管（11）

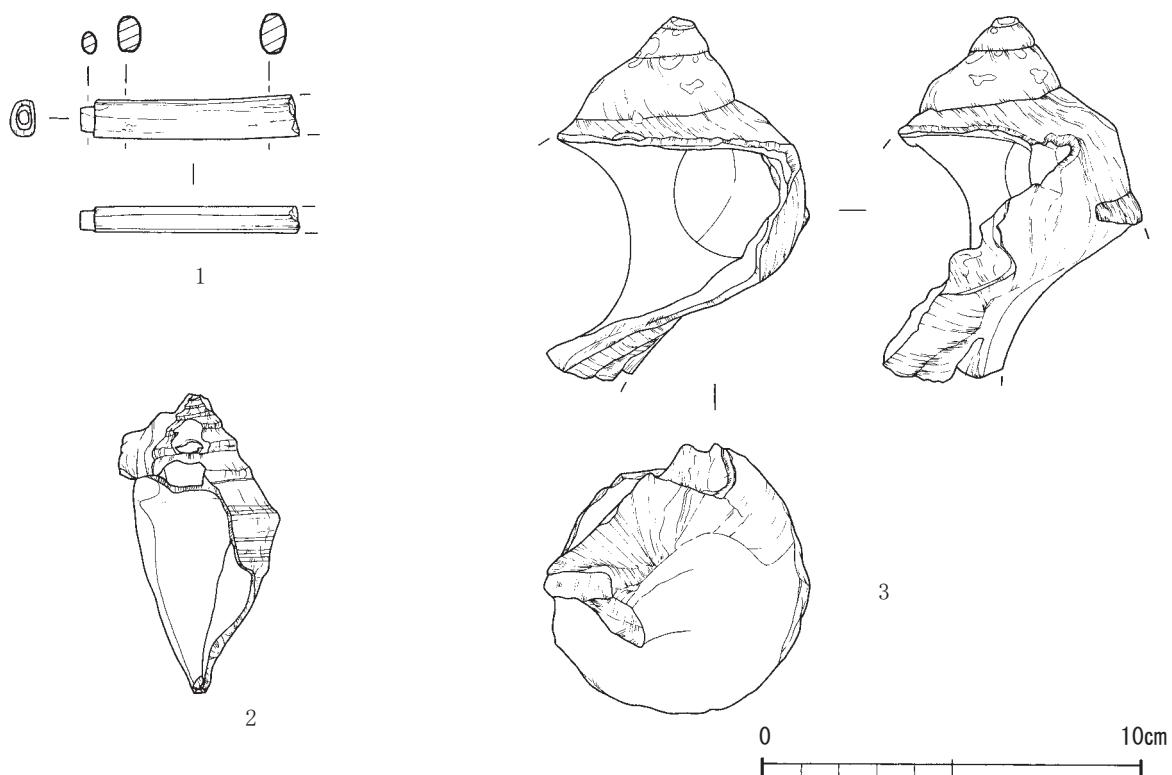
F 骨製品・貝製品

第7図1(図版12の1)は骨製品で右部分が破損した製品である。用途や素材は断定できなかった。断面の形状は橿円形で、右上にわずかに弧状を描くような延長線が延びている。左部分はジョイントをするためか抉りがありその部分には約3mmの孔、3.3cmの横孔がある。残長5.8cm 幅1.0cm 重さ4.7gである。墓庭南西側掘り込み埋土からの出土。

同図2(図版12の2)はクモガイを利用した製品である。用途は不明である。体層部のほとんどが破損をしており殻軸だけが残っている。殻長部に孔(0.7×1.2cm)が確認できるが意図的な感はうけない。残長7.8cm 重さ33.4g。墓庭埋土からの出土。

同図3(図版12の3)はヤコウガイを利用した製品である。貝匙の材料を取ったあとなのか、体層部は打割調整が確認され、殻軸だけがかろうじて残っている状態である。残長9.6cm 重さ160.8gである。『垣花村跡』(註1)に似た製品が得られている。墓庭埋土からの出土。

註1 『垣花村跡』—那覇港湾内下水道工事に伴う緊急発掘調査報告— 那覇市教育委員会 2011年3月



第7図(図版12) 骨製品(1)、貝製品(2・3)

第VI章 総括

前章までに発掘調査の成果について述べた。ここでは、今一度整理してまとめとしたい。

遺跡の立地について

本遺跡が所在する陸上自衛隊那覇駐屯地内には、「鏡水名座原A遺跡」「鏡水名座原B遺跡」「鏡水名座原古墓群」「鏡水箕隅原A遺跡」「鏡水箕隅原B遺跡」「鏡水箕隅原D遺跡」「鏡水箕隅原E遺跡」「鏡水水溜屋原遺跡」「鏡水土砂場原A遺跡」「鏡水土砂場原B遺跡」など多数の遺跡が近年確認されている。

さらに、遺跡の周辺には、「住吉遺跡」「御物グスク」「屋良座森グスク」、港湾北岸に所在する「三重グスク」「渡地村跡」などを含む那覇港周辺遺跡群、また、16世紀代に整備されたことが知られる「真珠道」など琉球王府時代の重要な遺跡が立地する。特に、渡地村跡の発掘調査の成果は、琉球王府時代における那覇港の重要さを改めて知らしめた貴重なものとなっている。

また、旧石器時代の沖縄県指定史跡「山下町第一洞穴遺跡」、沖縄新石器時代前IV期・後期の「ガジャンビラ丘陵遺跡」、沖縄新石器時代後期の「那崎原遺跡」など先史時代の遺跡も位置している。このことから、本遺跡周辺は古き時代から先人達の格好の生活環境であったことがうかがえる。

さて、本遺跡は、陸上自衛隊那覇駐屯地内における本格的な古墓の発掘調査となった。第I章でも述べたとおり、同地域は、立ち入りの制約された区域であったため、埋蔵文化財の有無さえ確認されていないのが現状であった。今後、地区内の開発についての動向が注意される。諸開発等の計画には、埋蔵文化財の取り扱いが極めて重要な位置を占めると言える。

遺構について

遺構の外觀は、亀甲墓の様相を呈する。その造りは、基本的に基盤の琉球石灰岩を掘り込んで墓室を形成する。

墓室の基盤が脆弱であったためであろうか、琉球石灰岩の小礫と赤土にて補強している(第4図及び図版7)。その墓室を構成する赤土について、「土壁状」を呈することから、特別な土が用いられている可能性が指摘された。このことから、科学分析を行った(株式会社

文化財サービスへ委託。附篇参照)。X線回折分析及び剥片作成による偏光顕微鏡観察を行った結果、「島尻マージの特性と、特に異なる点は見出せない。また、漆喰などを示唆するような特徴的な混和剤も見受けられない。」とのことであった。今後、類似する資料の増加に期待し、同様の分析の動向にも留意したい。

墓口及び正面(ソデ石、サンミマーなど)は、大き目の琉球石灰岩の切石を用いる。「マユ」や「カガミイシ」などの石材は、遺跡発見当時、すでに崩落していたため、現況の遺構では、その正確な姿は観察できなかった。そのため、現地調査においてその石材の計測を行って資料化している(有限会社ティガネー 吉岡氏・譜久里氏・高江洲氏ほか)。今回の報告では、紙幅の都合上、割愛した。

遺構に向かって右側（ウーシ、東側のカキ等）及び墓庭は、基盤の琉球石灰岩をはつて形を整えている。

遺構全体としては、漆喰が塗布された痕跡が確認できたことからも、一瞥して、手の込んだ造りであることがうかがえた。

遺物について

遺物は、蔵骨器20点の他に、中国産磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、骨製品、貝製品、石製品（石器・硯など）、指輪、煙管、円盤状製品、貝など多種多様な資料が518点得られた。蔵骨器には、銘書（ミガチ）が確認できる資料が3点確認されている（第4表参照。第5図、図版10参考）。

以下にまとめると、

氏名及び位階と考えられる文字・・・「原田」「高良」「童名樽」及び「筑登之」

年代がうかがえる文字・・・「明治・・・廿年旧亥七月四日」「光緒六匣」「图口旧九」
蔵骨器の出土数が少ないながらも貴重な文字資料となった。

その他の遺物では、骨製品（第7図1、図版12の1）・貝製品（第7図2・3、図版12の2・3）の出土が興味深い。今回報告できなかった資料には、石器（石斧や磨石）などが得られている（第5表）。これらは、主に沖縄先史時代の資料として知られており、本調査区の周辺に、別の遺跡の存在が期待される。

出土した人骨は、墓室の2段目タナから小骨片1点、墓室のシルハラシドウクマから成人骨片少量、サンミデー東側掘り込み内から、少なくとも2体分（成人女性1体、性別不明成人1体）との分析が得られた（株式会社 文化財サービス 青山氏・土肥氏ほか 附篇参照）。

成果のまとめ

蔵骨器に記された文字資料の中で、「原田」の文字は、本古墓の所在する丘陵が「ハラタ毛」と称されていたこととの関連性がうかがえて興味深い。

また、本遺構の年代観は、蔵骨器の出土数が少なく、結論を導き出すのは早計であろうと断わったうえで、「全体的な印象として、判読できた銘書が19世紀後半ということもあり、比較的後代の時期に使用された墓ではないかと考える。」とした。これは、その他の遺物の中の煙管（第6図11、図版11の11）が19世紀以降の資料と知られていることからも支持される。今後、他の資料（中国産青花：第6図4～6 図版11の4～6、「朝陽硯」銘のある硯：図版8 右3段目など）の年代観や「ハラタ毛」周辺に発見が期待される古墓の調査成果、聞き取り調査などの展開も含めて検討課題としたい。

今回の報告は、古墓1基のみの調査成果であった。しかし、本遺跡が立地する特別な環境（陸上自衛隊那覇駐屯地）の中での貴重な調査成果であり、今後、同地区における諸開発計画の動向には留意していく必要があろう。

附 篇

鏡水箕隅原古墓群出土人骨

鏡水箕隅原古墓群の墓室壁の赤土分析

鏡水箕隅原古墓群出土人骨

はじめに

那覇市教育委員会による鏡水箕隅原古墓群の発掘調査で出土した人骨について報告する。

調査の方法

性別、年齢などの鑑定は Knussman (1988)¹⁾、Brothwell (1981)²⁾ の基準に従った。

人骨の出土状況

1号墓墓室シルハラシドウクマ、墓室奥壁タナ、サンミデー東側掘り込みから少量の人骨が検出されている。人骨の保存状態は悪く、形態的特徴が分かるようなものは得られていない。

出土人骨の所見

1号墓墓室シルハラシドウクマ出土の人骨（少量の成人骨片）：

大腿骨片、頭骨片、椎骨片、指骨片等、少量の骨片が検出された（写真1-a）。骨片はいずれも成人のものと思われるが、詳細は不明である。

1号墓墓室奥壁タナ2段目（詳細不明）：

頭骨片と思われる小骨片が1点のみで、詳細は不明である（写真1-b）。

1号墓サンミデー東側掘り込み出土の人骨（成人女性1体、性別不明成人1体）：

明らかに保存状態の骨なる骨片が認められるため、少なくとも成人骨2体分が含まれると考えられる（写真1-c,d、写真2-e,f）。明らかに同一部位と確認できたのは、左側頭骨（写真2-eの矢印部分）と大腿骨（写真1-c）である。

また、人骨片のうち、前頭骨と左側頭骨、比較的保存の良い右大腿骨は女性の特徴を示すことから同一個体の可能性がある。残存する歯の歯式を以下に示す。咬耗が弱いことから、若い個体が含まれることを示している。

			P ¹			I ¹	C					
	P ₂	P ₁	C	I ₂			C	P ₁				

この他、歯が生前にすべて脱落し歯槽骨の吸収が進んだ上顎骨片、加齢による変形性脊椎症と思われる椎骨片（写真1-d）が認められることから、老齢の個体も含まれている。

以上のことから、サンミデー東側掘り込みから出土した人骨片は少なくとも2体分、そのうち1体は女性、また2体のうち、1体は20代から30代の若い個体、他は老年の個体と考えられる。

まとめ

那覇市教育委員会による鏡水箕隅原古墓群の調査において、近世から近代と考えられる人骨が出土した。概要は以下の通りである。

1. 人骨は1号墓墓室内、サンミデー東側掘り込み内から検出された。
2. 墓室内シルハラシドウクマから、成人の骨片少量が検出された。
3. 墓室内奥壁タナ2段から、小骨片1点のみが検出された。
4. サンミデー東側掘り込み内から、少なくとも2体分（成人女性1体、性別不明成人1体）が検出された。

参考文献

- 1) Knussman R. (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.
- 2) Brothwell DR (1981) Digging up Bones. Cornell University Press.

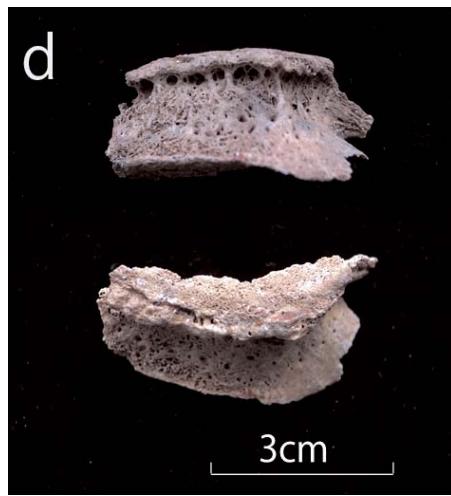


写真1 a: シルカラシドウクマ b: 奥壁タナ人骨
c: サンミデー東側掘り込み大腿骨 d: サンミデー東側掘り込み椎骨

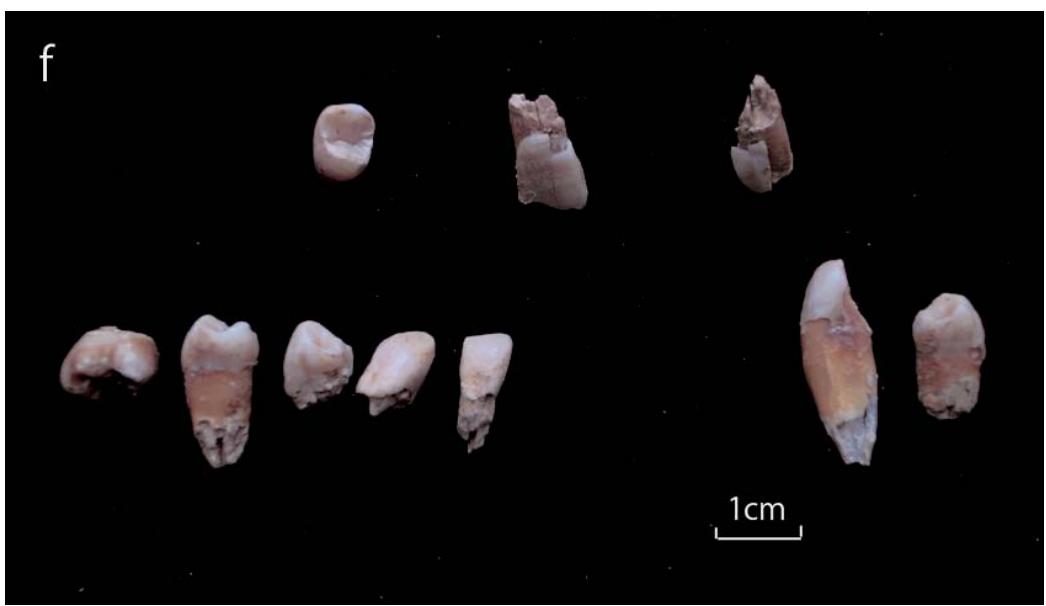


写真2 e: サンミデー東側掘り込み頭骨 f: サンミデー東側掘り込み歯

鏡水箕隅原古墓群の墓室壁の赤土分析

はじめに

本報告では、墓室の壁を構成する石材の間を埋める褐色土を対象として、X線回折分析および薄片作製による偏光顕微鏡観察を行い、その岩石学的特性を明らかにすることにより、島尻マージとの関係について検討する。

1. 試料

試料は、第1号墓の墓室奥壁を構成する石積みの隙間を埋める赤土(奥壁の赤土)より採取した土壤1点である。全体的には、にぶい褐色を呈するシルト質の土壤であるが、土壤中には径1~4mm程度の灰黄色を呈する粒子が散在する。

2. 分析方法

(1) X線回折分析

不定方位法X線回折試験を行った。試料中に含まれる主要な鉱物の種類を明らかにすることを目的としている。

- ①乾燥機において60°C以下で12時間以上乾燥させ
- ②振動ミル(平工製作所製 TI 100;10 ml 容タンクス
　　テンカーバイト容器)を用いて粉碎・混合し
　　↓
　　粉末試料(200 mesh, 95%pass)とする。
- ③粉末試料をX線回折用アルミニウムホルダーに充
　　填し、不定方位試料を作成する。
- ④X線回折測定装置を用いて表1に示す条件により
　　測定する。

(2) 薄片作製観察

薄片観察は、試料を0.03mmの厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

- ①試料をダイヤモンドカッターにより切断、整形し、薄片用のチップとする。
- ②チップをプレパラートに貼り付け、#180~#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1 mm
　　以下
　　まで研磨する。
- ③さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03 mmの厚さに調整する。
- ④プレパラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とす
　　る。
- ⑤薄片は偏光顕微鏡下において観察する。

表1 . X線回折測定条件

装置	理学電気製MultiFlex
Target	Cu(K)
Monochrometer	Graphite 湾曲
Voltage	40 KV
Current	40 mA
Detector	SC
Calculation Mode	cps
Divergency Slit	1 °
Scattering Slit	1 °
Receiving Slit	0.3 mm
Scanning Speed	2 ° /min

3. 分析結果

(1) X 線回折分析

試験結果の同定解析は、X線粉末回折線解析プログラム JADE を用い、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を PDF(Powder Diffraction File)データから検索し、同定した。

結果は一覧表として表 2 に示し、X線回折図は図 1 に示した。

図中の最上段が試料の回折図であり、下段が同定された結晶性鉱物もしくは化合物の回折パターンである。量比は、最強回折線の回折強度(cps)から、多量(>5000 cps)、中量(2,500～5,000 cps)、少量(500～2,500 cps)、微量(250～500 cps)、および、きわめて微量(<250 cps)という基準で判定した。

不定方位法回折試験により、多量の石英、少量の7 Å型ハロイサイト・方解石およびきわめて微量のカリ長石・斜長石・雲母鉱物・緑泥石・針鉄鉱が検出された。石英の回折強度は強く、 3.34 \AA ($2\theta : 26.7^\circ$) の最強回折線は11,000 cps 程度を示す。粘土鉱物は7 Å型ハロイサイトが主体となっており、7 Å ($2\theta : 12.6^\circ$) 付近に回折する(001)面反射は微弱であるが、 4.48 \AA ($2\theta : 20^\circ$) 付近および 2.57 \AA ($2\theta : 35^\circ$) 付近において低角側で低く、高角側で高くなる非対称な回折線が明瞭である。

(2) 薄片観察

観察に際しての量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量(>50%)、中量(20～50%)、少量(5～20%)、微量(<5%) およびきわめて微量(<1%) という基準で目視により判定した。代表的な個所については下方ポーラーおよび直交ポーラーにおいて写真撮影を行い、写真図版として添付した。以下に鏡下観察結果を述べる。

本試料には、少量～中量の鉱物片、岩片および化石片が含まれる。鉱物片は、粗粒シルト～中粒砂サイズであり、粒径は不均一である。構成鉱物は、石英が主体であり、ほかに斜長石、カリ長石、白雲母、黒雲母、緑簾石、ジルコン、不透明鉱物、方解石が認められる。岩片は、ほとんど石灰岩であるが、多結晶石英なども認められる。岩片の粒径は不均一であり、細粒砂から中礫サイズのものが認められる。化石片は石灰質化石であり、有孔虫、二枚貝、石灰藻などが認められる。

基質は、シルトおよび粘土で埋められ、塊状、褐色を示す。基質の多くは、褐色を呈する粘土鉱物によって埋められ、炭酸塩鉱物、水酸化鉄、炭質物、鉱物片などを伴う。粘土鉱物の主体は、X線回折試験の結果を考慮すると、7 Å型ハロイサイトとみることができる。基質における褐色の色調は、水酸化鉄による汚染が原因とみられる。水酸化鉄は、微細粒状を呈するものが認められることから、フランボイダル黄鉄鉱の酸化に伴って生じたと考えられる。

表 2 . X 線回折試験による検出鉱物

試料名	検出鉱物							
	石英	カリ長石	斜長石	7型ハロイサイト	雲母鉱物	緑泥石	針鉄鉱	方解石
奥壁の赤土		±	±		±	±	±	
量比 ：多量(>5000 cps)、：中量(2,500～5,000 cps)、：少量(500～2,500 cps)、+：微量(250～500 cps)、±：きわめて微量(<250 cps)								
X線チャート上で使用した鉱物名 石英: quartz カリ長石: microcline 斜長石: albite 7型ハロイサイト: halloysite-7 A 雲母鉱物: muscovite 緑泥石: clinochlore 針鉄鉱: goethite 方解石: calcite								

4. 考察

渡嘉敷(1993)は、島尻マージの母材に関しては大きく二つの考えがあり、一つは琉球石灰岩の風化物、もう一つは大陸からの風成塵も含めて周辺土砂由来の風化物であることを述べている。後者の考えについては、成瀬・井上(1990)のように大陸からの風成塵が母材の主体となっていると主張するものもあるが、これらに対して、寺島ほか(2004)は、土壤の元素組成と元素の挙動から、広域風成塵は土壤母材の一部を構成するが主要母材ではなく、主要母材は琉球石灰岩の風化残留物、石灰岩の上位に分布する場合の多い赤褐色粘土層、石灰岩中に狭在する粘土等非石灰質堆積物等であろうとしている。

X線回折および薄片観察により、今回の試料中に確認された鉱物やその他の碎屑物は、いずれも寺島ほか(2004)の述べた主要母材に由来するものであると考えられる。また、渡嘉敷(1993)による島尻マージのX線回折分析からは、主要な粘土鉱物として7 Å鉱物のカオリン鉱物が検出されており、これは7 Å型ハロイサイトの可能性が高いと考えられている。これらのことから、今回の分析により得られた奥壁の赤土の特性の中に、島尻マージの特性と、とくに異なる点は見出せない。また、薄片観察の状況から多少の石灰質化石などが見られるが、漆喰などを示唆するような特徴的な混和剤も見受けられない。今後、墓室周辺の島尻マージそのものの分析による詳細な対比で、その差異の精査からさらなる確認が望まれる。

引用文献

- 成瀬敏郎・井上克弘,1990,大陸よりの使者-古環境を語る風成塵.サンゴ礁地域研究グループ編日本
本のサンゴ礁(自然生態地域編)熱い自然-サンゴ礁の環境誌,248-267.
- 寺島 滋・太田光恒・岡井貴司・今井 登・御子柴真澄,2004,東海・沖縄地域の非沖積土壤の母
材と元素の地球化学的研究.地球科学,58,317-336.
- 渡嘉敷義浩,1993,沖縄に分布する島尻マージおよびジャーガルの土壤特性.ペドロジスト,37,99-
112.

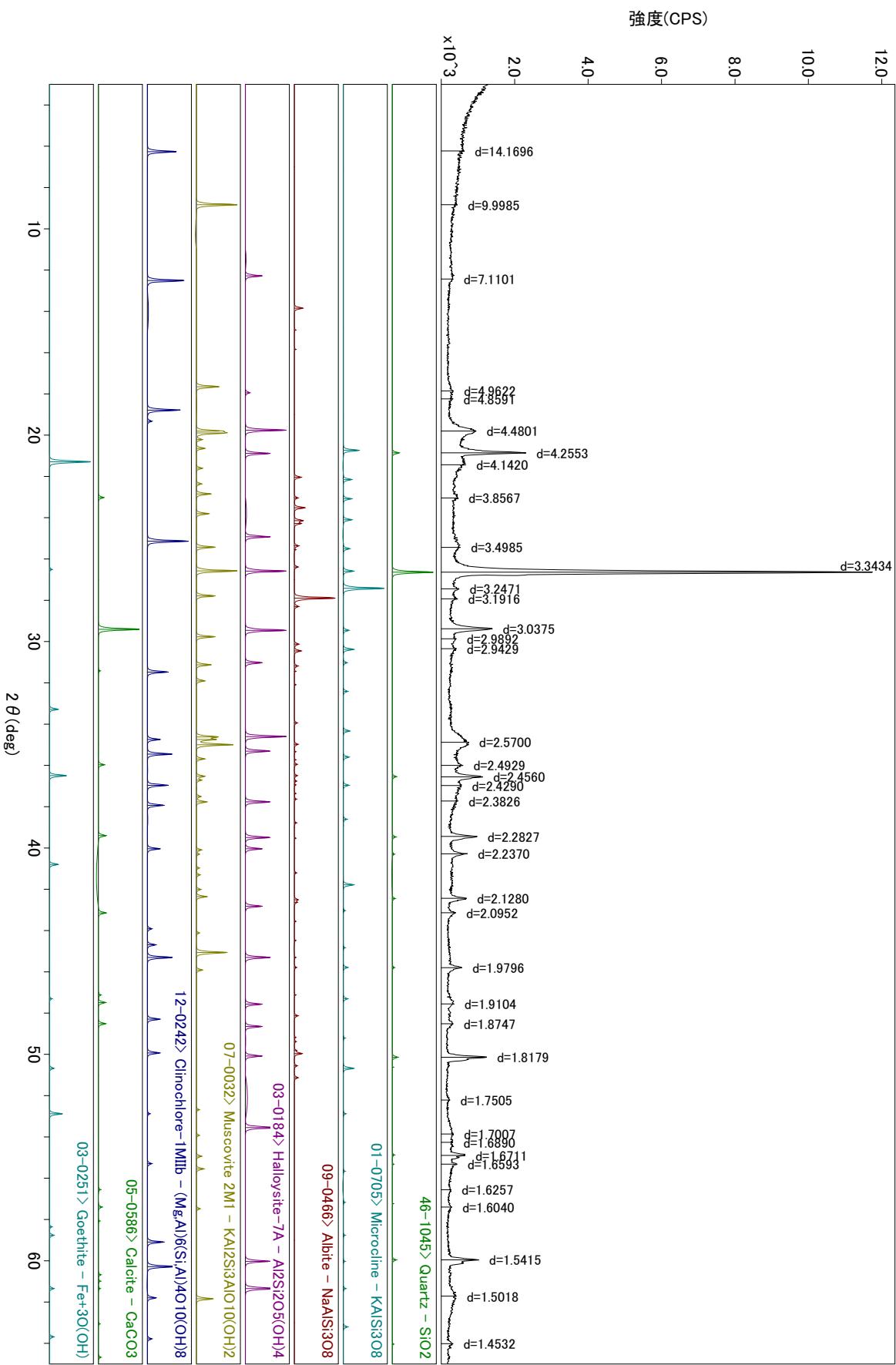
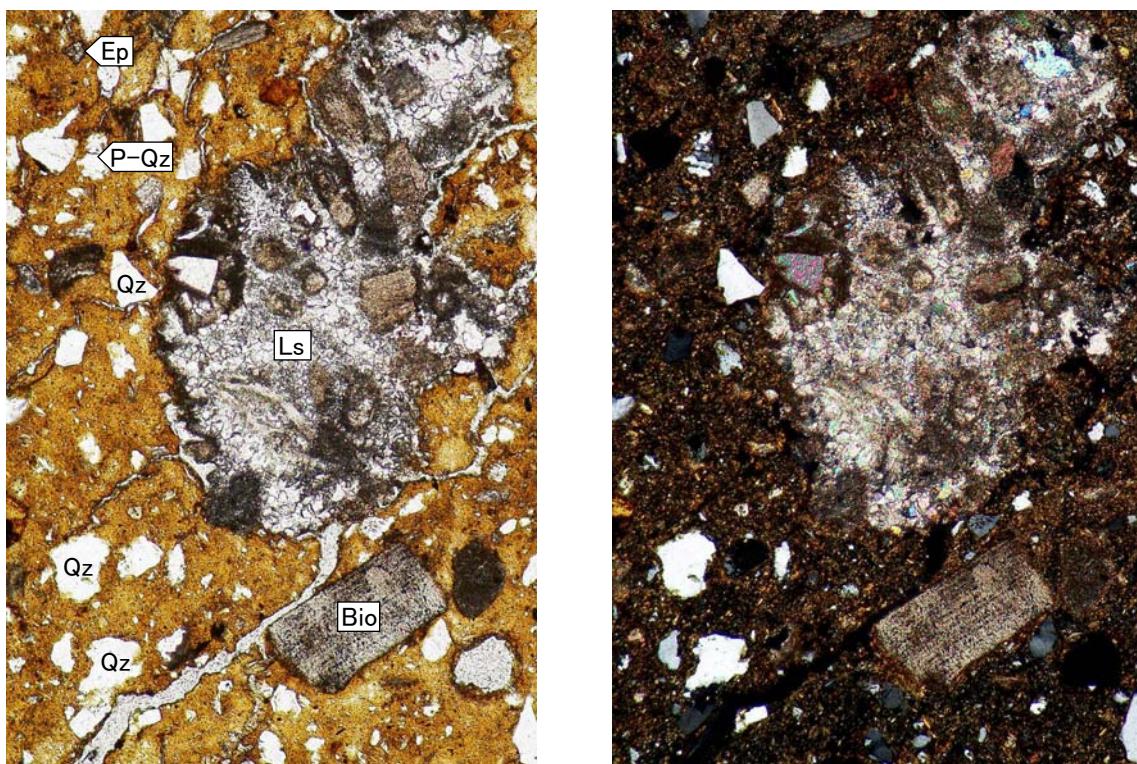


図1. 奥壁の赤土のX線回折チャート

図版1 土壤薄片



1.第1号墓 奥壁の赤土

0.5mm

Qz:石英. Ep:緑レン石. Ls:石灰岩. P-Qz:多結晶石英. Bio:化石片.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

図 版



図版1 遺跡一帯の空中写真（2010年撮影）

(S=1:10,000)



図版2 遺跡の遠景（西から）



図版3 遺構の近景

1段目左：調査1日目の状況
2段目左：調査1日目の状況
3段目右：調査2日目の状況
4段目左：調査4日目の状況

1段目右：調査1日目の状況
2段目右：調査2日目の状況
3段目右：調査4日目の状況
4段目右：調査9日目の状況



図版4 磁気探査業務の作業状況

1段目左：水平探査作業状況
2段目左：水平探査作業状況
3段目右：確認探査作業状況
4段目左：確認探査作業状況

1段目右：水平探査作業状況
2段目右：水平探査作業状況
3段目右：確認探査作業状況
4段目右：確認探査作業状況



図版5 作業状況①

- 1段目左：安全祈願の様子
- 2段目左：ラジオ体操の様子
- 3段目左：写真撮影作業状況
- 4段目左：基準点測量作業状況

- 1段目右：安全祈願の様子
- 2段目右：バックホーによる作業状況
- 3段目右：作業状況の写真
- 4段目右：基準点測量作業状況



図版 6 作業状況②

- 1段目左：屋根上・墓庭の調査状況
- 2段目左：墓室の調査状況
- 3段目左：写真測量の状況（標定点測量）
- 4段目左：完掘状況の写真撮影状況

- 1段目右：右垣上の岩盤周辺の状況
- 2段目右：サンミラーの調査状況
- 3段目右：写真測量の状況（写真撮影）
- 4段目右：墓庭埋め戻し作業の状況



図版7 遺構の状況

1段目左：完掘状況
2段目左：サンミデーの状況
3段目左：香炉の状況
4段目左：墓室の状況（左壁）

1段目右：完掘状況
2段目右：墓正面上の状況
3段目右：墓室の状況（墓口側）
4段目右：墓室の状況（奥タナ周辺）



図版8 主な遺物の出土状況

1段目左：墓室の状況（蔵骨器：調査前）
 2段目左：墓室の状況（蔵骨器：調査後）
 3段目左：奥タナ2段目の状況（指輪）
 4段目左：サンミデーの状況（蔵骨器）

1段目右：墓室の状況（蔵骨器：調査開始後）
 2段目右：奥タナ2段目の状況（蔵骨器等：調査後）
 3段目右：墓庭から出土した硯
 4段目右：サンミデーから出土した人骨



図版9（第5図） 専用藏骨器（蓋1、身2）



図版10（第5図） 専用藏骨器（身1）



図版11（第6図） その他の遺物(沖縄産陶器1～3、中国産磁器4～6、円盤状製品7・8、指輪9・10、煙管11)



1

2



3

図版12 (第7図) 骨製品 (1)、貝製品 (2・3)

報 告 書 抄 錄

那霸市文化財調査報告書第95集

鏡水箕隅原古墓群

—沖縄西海岸道路「那霸西道路」建設事業に係る緊急発掘調査報告—

発 行 2013年3月29日
那霸市教育委員会
〒900-8553 沖縄県那霸市泉崎1-1-1
編 集 那霸市教育委員会文化財課
TEL 098-917-3501
FAX 098-917-3523
印 刷 株式会社 東洋企画印刷 那霸営業所
〒901-0152 沖縄県那霸市小禄3-12-1
TEL 098-857-2657
FAX 098-995-4448
